

第72回定例河川塾

日 時：平成19年4月26日（木）19：00～

場 所：環境プラザ（大阪府環境情報センター1階）

テーマ：高瀬川のほitori

話題提供：宮本博司氏（京都「樽徳」会長）

1. おはなし

■自分のこと

実家はかつて樽を造って、すぐ前の高瀬川で伏見に運んでいた。昨年退職して、樽ではなく、伏見のうどんのラベルをつくった。これが初仕事。

行政では、最初は天竜川上流へ行き、昭和36年土砂くずれのあとの砂防を担当した。テントをかついで行き、カモシカを見たことが思い出。のち佐賀県で結婚、子どももできた。次に国土庁は全国総合開発を担当した。ちなみに元和歌山県知事の木村さんは同僚だった。次に淀川に行き、フェニックスで大きな委員会運営に携わった。28年の間、ほぼダムと堰の仕事をしていた。苫田ダム3年いて、のち中部地建で長良川の窓口をした。

■苫田ダムのこと：宮本がダム行政にかかわる原点

地元は全部反対だった。合併で奥津町ができた時に、その前提として、わが国初の建設阻止条例ができた。ダムにかかわる一切の工事はしないという42年協定と言われるものもあった。平成16年竣工した。平成2年から3年間勤めた。景観などととても良好にできているダムだと思う。「なぜ水没させなあかんねん」「造らざるを得ない 円満円滑早期に」、「うそやごまかしはもたん」と思った。役場に行くとまちの職員は冷たい視線だった。

完全に地域が破壊されている状況だった。論理的には言えないが、当時の状況の中では、造らざるを得ない、お金をいくらかけてもいいものを造らざるを得ないと思った。日笠前町長に会いに行った。その時、日笠さんがうらみつらみを言った。しかしお酒を飲んでいて、奥さんがブリの切り身を出してくれた。恐らく、遠く津山で買ってきた自分たちのおかずだった。その時、この人たちを苦しめてきたのだから、真剣に対応しなければと思った。うそとかごまかしをしなかったのが救いだったと思う。あの体験が後のポイントになった。「地の怨念」があった。町内の人間関係はぐちゃぐちゃになっていた。当時岡山県は長野知事が推進していた。建設省と仲の良い、朝田さんという人がいた。その人が一番悪いのは建設省だと言っていたのがショックだった。

その後長良川へ異動。レクチャーを受けて平成5年7月に記者会見したが、その場は不信感で一杯だった。調査をしようとしてゲートを閉めようとする前の晩に、天野礼子さんたちの船がきた。その後、出水があり、ゲートを上げるために、船をつないでいたロープを切ってゲートを上げた。

その後円卓会議が開かれた。会議は公開であった。その頃マスコミは、長良川河口堰のことは全部記事にしていたので、プレッシャーも大きく、朝目が開くと、新聞記事が気になり、コンビニで新聞を読んだ。「なんでこんな目に会うのか」とも感じた。苫田もそうだが、この時も行政に

対する不信感を感じた。

その後、職員を対象とした研修で、信用されるためにどうするかを話す機会があった。まず「隠さない」こと。情報を出さないことが最も問題だと思う。それまでは「情報は出してはいけない」だった。調査は全部情報公開しようとして、全部公開した。公共事業では日本で初めてだろう。

■情報公開はイヤイヤするのではない。

公開するほうが楽なはず。情報公開に何のメリットもないという人もいた。しかしそれは情報操作だと思う。長良川の堤防を、電磁波探知機で調査した際も、みんなの前で公開すると言った。どきどきした。出てきたものが表面近くの木材だったので、「取り除いて埋める」といったらみんな納得した。もし、こっそりしていたらおしまいだったと思う。

■「情報は情けを伝えるもの」。(建設省の美化を呼びかける看板の横に汚れた看板) まずきたない看板をとるのが先。きれいなパンフレットを配っても無理。

■ウソをつかない。

- ・「堰ができれば、水質はきれいになる」この一言で反対しようと思いました。(西條八束)
- ・洪水被害数字、写真、なども実際の場所と異なることも多い。

■ごまかさない

- ・真剣勝負にごまかしは通じない。
- ・わかっていない人ほど、専門用語でごまかす。

■逃げない

- ・まあまあ、そんな堅い話はやめて・・・でうさんくさいと思った。という人がいた。
- ・前にでないとエラーする。

■「役人」しない

- ・建前、横並び、前例、これは決まっていること、と言わないことが重要。

■「私は正しい」しない

・川についてわたし達が知っていることはほんの少し。わたしが正しいと言った瞬間に、信頼関係はできない。でもそう言う人は多い。

■長良川河口堰のこと

長良川河口堰。はじめて見た時ショックだった。それまで説明をしてきていた。全部わかっているつもりだった。しかしその瞬間に初めて見た。知らないのに説明していた。しかし反対集会の人で河口堰を知らない人もいた。そこからわかることは、「推進派は推進したいだけ。反対派は反対したいだけ」。これは絶対したくなかった。結局国の人間は、かつて吉本新喜劇にいた岡八郎のギャグ「おれは空手を習った。通信教育で」ということをしている。これはまずい。

そのような経過を経て、今のダム計画の見直しをしようとなった。しかし、後からショックだったこともある。「ダム事業審議委員会」は、委員の選定を知事に任せたが、徳島では第十堰の場合は、国の工事事務所から県に指示がきていたと言うことを最近になって聞いた。これは11年後にわかったこと。

■ 河川法

以前の河川法は、治水、利水という、分かりやすい目標があった。しかし慣性力では進まないことも社会の流れ。「任せてください」から、「勝手にしません」となった。これが平成9年の改正。わたしとしては、●河川法行政に対する不信感の払拭、●職員組織の防腐、も重要と考えていた。なんとかできるチャンスが河川法の改正だったと思う。それで、「さあキャッチボールを始めよう」。となった。

■ 淀川水系流域委員会のこと

(1) 公開の準備段階で委員選定、(2) 徹底した情報公開、(3) 委員会事務局の独立。この3番目はいまだに重要だと考えているが後に続く事例がない。

推進と反対が始めから進むのではなく、まず現状の共有をして、知っていることを出して、心配していることを出しあおうとした。「どうするんだ河川敷」の例でいえば。初めはグラウンド推進派と河川に戻す派それぞれが主張していたが、推進派は生き物のことも考えようとなり、戻す派は今のところは我慢しようと言うようになった。オープンな場でお互いに相手の思いを聞く良い例だったと思う。

■ ダムもピンクの状況（どちらかといえば少しか推進側の図）

ダムは外科手術にたとえることができる。医者が手術について説明もしないと不信感がでる。これが今までの国土交通省に共通点があると思う。説明責任がなされていないのだろう。

流域委員会にたいして、「お金がかかる」というのはわかる。しかし、「時間がかかる」というのはナンセンスだと思う。計画してモニタリングして意見を聞く。そしてまた、フィードバックするという永遠に継続するシステムに、時間がかかるということ自体まったく意味がない。「合意できるわけがない」というのもおかしい。現状の共有、課題の共有、これで対策の積み上をしていくしかない。合意できたことを実施していけばよいと思う。

■ 通信教育で川を語ることなかれ。

吉本のギャグになるようなことを堂々とやっているのがおかしなところ。現在のレビュー委員会で変える必要があると思うのは、流域委員会もワンオブゼムであることだと思う。まつりあげられてはだめだと思っている。

■ ギブしないとテイクはない

民間になって、商売をしている人から、「買ってもらうのは後の後」「相手に対して何ができるかが大切」「信用ができるのは後の話」「出さないと入りはない」と言われてなるほどと思った。

2. 質疑

福廣：既存不適格みたいなこともありそうな気がするが

宮本：建築はできたもの。計画が決まっているダムは適用されないのかということ、それは違うだろう。計画も含めて見直すから意味がある。

久保田：しかし、ダムに反対していた人も様々な事情で苦しんで賛成にまわったりするが、移転などもかなり進んだところで、ダムをやめるというのは、あんまりなことだと思う。ダムのこと

でいえば、下笠ダム松原ダムの、蜂の巣城反対運動のことを思い出す。室原さんと信頼関係ができた事務所長さんのお話と重なる気がした。

宮本：中止もあることは地元の不信感大きい。でもほんとに多くの人々が納得できるかどうかだろう。しかしやりますとは言えない。論理ではなく、気持ちをふまえてぎりぎりの判断をするしかない。水没する人は大きな苦悩がある。それと同じ苦勞を、造る側の人と一緒に悩む必要がある。すぐに外科手術をしようと言う人ではなく、ダムをどうしても造るという場合は、造りたくないけれど造らざるを得ないというギリギリの判断しかない。

中川：宮本さんのセンスを、兵庫県の人も持ってほしいと思うが、持てる人と持たない人の差はどこにあるのだろうか。

宮本：昨日も兵庫県の人が来ていた。しかし県は国土交通省の枠があってできないと言う。でもそれでいいとは思わない。今の構造を変える必要がある。国の役人は「通信教育」なので、まずい。やはり県の人でも「逃げ」だろう。自分の川を思ったら国のいうことはまずいと言わなければならない。もうひとつ、川のことではキャッチボールしないのは、(知らないのに)自分が一番良く知っているという意識が根強くある。しかしそれでは住民は信用しない。

福廣：役所はなぜ東京弁なのだろう。または慇懃無礼なのだろう。

宮本：組織のメンツとかあるが、もっと川をすなおにみて行動するほうがかえって前に進むかもしれない。国土交通省が自ら応援してもらわないようにしている状況がある。

上田：長良川河口堰反対に行っていた。漁協もよく活動しており、生の話が聞けるのが面白かった。(住民同士が勉強して、話し合っ解決できるようになるのが大切だと思う：編集者注)。

宮本：行政は制度疲労している。住民がしっかりしないとできないだろう。

今本：反省しながら聞いています。淀川は外部との接点がなかった。しかし手段もなかった。次回の課題だろう。第2の宮本はでるのだろうか。危機感ある。やはり住民なのだろう。

宮本：細川さんとか、住民の方が頑張っているのは、やはり成果につながると思う。

■懇親会で

感動することは大切。思いを伝えることは大切。真剣になることも必要。

福廣：イタセンパラの子どもを見たというのは、ウソだと思ったが、今はあり得ると思っています。以上。

(文責 久保田)